

あれからも、まだまだ —この歳で独検や 英検に挑戦して—

経済学部
大島 隆雄

60代の経済学の老教師が、ことさら独検や英検に挑戦してしみじみ感じたことを、これから外国語をマスターしようとする若い学生諸君に伝え、なにかの参考にしていただきたい。

かつて3年前、私は豊橋校舎の外国語研究室発行の『LLニュース』No.17に、「ドイツ語との長き旅路の果てに」という一文を寄稿したことがある。そこでは、1997年夏にブレーメンでたて続けに三つの講演とそれに続く討論を行なったことと、それはいわば、ドイツ経済を研究するためのツールとして、40年以上にわたって用いてきたドイツ語能力の総決算のように思え、ある達成感にひたれたことを述べている。当時、ドイツ語で苦しむのは、そろそろこれで終わりにしたいという気持ちだった。

しかし皮肉にも、そこからまた、わざわざ自ら設けた目標への戦いが始まった。それは、これまで永年やってきたドイツ語や、昔は少しはやった英語の能力をなんらかの検定試験を受けて確認しておきたいというものであった。若い人々に交って受験するのは恥づかしい限りであったが、かまわずやることにした。

1999年春の名大で行なわれた独検では、3・4級しかなかったため、まず3級を受けた。『全問題集』の他、2・3級用の参考書なども勉強したかいあって、忘れていた語彙や文法なども思い出し、満点で合格した。春・秋通じて満点者は3名あったが、そのため表彰され、賞品として辞典をもらうことになった。しかしいい歳をしてそのためにわ

ざわざ行く気にもなれず、上京しなかった。

その年の秋、南山大で実施された独検では、いささか無謀とは思ったが、午前に2級、午後1級を受験した。また『全問題集』や、1級については参考書がないので、2級の参考書などで準備していった。しかし前夜、歳がいもなく緊張して4時間足らずしか眠れず、2級はなんとかあったが、昼食をとった後の1級では頭が朦朧として無残にも失敗したと思った。予想通り、1次試験の2級は合格したが、1級は不合格に終わった。しかし2級の2次の口答試験では武蔵大学まで出向き、これはなんとなく合格した。

独検1級はたしかに難しいが、それでも全然歯がたたないものでもないと感じた。私は2000年夏、愛大の学生に随伴して協定校のブレーメン州立経済工科大学に赴き、夏季講座の最上級に参加して、1ヵ月間、絞りだすように能力を鍛えた。帰国後の10月、胃潰瘍のため2週間入院を余儀なくされたが、病院から秋の1級に出願した。夏の訓練と入院中の休養によってか、11月の南山での1級1次試験は、今度はどうやら通過した。

その後、第2次の口答試験にそなえて、これまでの出題傾向を調べあげたところ、それらがすべて最近の日本の話題に関するものであることが分かった。そのため年末・年始にかけて10間ほど予想し、独作しておいたところ、早稲田で選択出題された4問中、「学校における成績水準の低下」というテーマが的中した。私は2分間つかえずに喋り、その後の追加質問もなんとかこなせた。今年2月初め受け取った通知は、合格だった。

これで一つの目標が達成されたという安堵感にみたされた。だが冒頭にのべたように、ドイツ語で講演したり、また論文は書いても、ドイツ人と同じようには話せないし、今後いくら努力してもそれは不可能であろうことも自覚している。

そこで私はもう一つの目標を探し求めた。それは若い頃に少しはやりながら、殆ど忘れかけていた英語を思い出そうということである。英語は今日、私たちが国際会議でドイツ人とさえそれで話さねばならないほど、国際的なコミュニケーション

ン言語となって、重要性を増しているからである。

今年の春から、私は慎重に英検2級から始め、1次・2次とも無事に合格した。独検1級のうえ英検2級もとったので、嬉しくなつてついつい人に話したところ、2級は高校生でも取れると、軽蔑的に批評されてがっかりした。そこで秋からは準1級に挑戦したいと思っている。

このように、最近3年間、私は2ヵ国語の検定試験を半分は使命感から、半分は楽しみながら受けまくった。その結果いろいろ感得したことがあるが、そのうち参考になるかもしれないと思うことを幾つかあげておきたい。

まず第一は、「若い頃に習得した知識と能力は一生の宝」との諺どおり、私のように高齢のものには、かつて習得したものを思い出すのが精一杯であつて、それを新たに伸ばすには非常に苦労が多いということだ。これはすべての知識や能力について言えることではあるが、とくに外国語についてそうである。だからそれは、ぜひ若いうちにマスターしていただきたい。

第二に、外国語検定の場合、学生のなかには、私のゼミ生にもそのような者がいたが、いっきよに高い水準を目指して、何度も失敗しながら、ついに合格する人もいる。だが、私の経験では、力に応じたところから始めて、一つ一つ高みに登っていく方がよいように思う。そうすれば、基礎的なものから高次なものへと着実に能力を伸ばせるし、自信をもって検定を受けることが楽しみにもなる。

第三は、とくに欧米の言語は構造的に日本語と非常に異なるため、私たちにとってリスニングがいちばん難しいということだ。そしてその困難は、1～2年留学したからといって自然に解消するわけでもない。一連の意味をもった言葉が、一連の音の流れと対応して理解できるためには、テキストを読みながら、市販のカセットやCD、またはLL教室のAV機器を用いて、独自に繰り返し訓練する必要がある。相手の言うことが分かれば、外国語はすでに半分、習得したも同然である。この

リスニング能力は、若い時ほどスムーズに上達するので、ぜひ、この点で努力するよう心がけてほしい。

イタリア語、杉田玄白、 『蘭学事始』

法学部

須藤 祐孝

イタリア語を学ぶ気などまったくなかった。それが、今や、一番親しむ外国語で一番苦労する外国語がイタリア語という具合になってしまっている。そのきっかけは、まことにあっさりとしたものだった。

大学院マスター・コースの終わり近く、指導教授から、有り難いことに、助手として本格的な研究者の道を進むよう勧めていただいた。同時に、これまで関心を持ってきたマキアヴェッリをこれからさらに本格的に研究していくなら、作品を原語で読まなければならないね、と穏やかな忠告をいただいた。その通りだと思ったので、私も穏やかに、はい、と答えた。その後すぐ始まる大苦戦など、まったく想像もしなかった。

それまで見ていた我が国のマキアヴェッリ研究のほとんどが、さらには彼の時代のルネサンス研究すらもが、ドイツの翻訳、研究に依存しそれに基づいたものであることに疑問と不満を覚えていた。だから、マキアヴェッリの作品を原語で読まねばならないという指導教授の言葉に、そうだその通りだ、さすが先生はいいことを言うなと生意気な感想を抱きながら、あっさり応じたのだ。その原語すなわちイタリア語のジャングルに迷い込